佐賀大学農学部同窓会報　第８号

ありあけ

●発行日　2011年６月１日
●編　集　会報編集委員会
●発　行　佐賀大学農学部同窓会
住所　佐賀市本庄町１　佐賀大学内
TEL 0952-23-1253　FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ　http://dousou.saga-u.ac.jp/

新たな連帯と絆を深めよう

農学部同窓会会長　金　丸　安　隆

平成22年６月の第25回農学部同窓会総会において、松尾会長の後任として選任されました。これから２年間努力して参りたいと思いますので会員の皆さまのご指導、ご鞭撻とご協力、ご支援をお願いいたします。

同窓会事務局より佐賀大学同窓会会報「楠の葉」(1980年～(昭和55年～))、農学部同窓会会報「ありあけ」(初版～) を借り受け一通り目を通しました。

すでに会員の皆さまはご承知の通り佐賀大学及び農学部は時代の要請に応じて変革し、充実をして参りました。同窓会も併せて変遷の歴史を辿っています。この間、大学の教職員始め同窓会役員の方々の並々ならぬ努力の結果、今日の姿があるものと心より敬意を表したいと思います。

さて、日本の組織活動は何時の頃からか衰退期に入りました。組織や集団の最小単位である家族の絆さえも希薄となり、自分の両親や親族の所在さえも不明という信じられない報道に驚くばかりです。同窓会の組織活動についても出身母校に対する関心の薄さ、先輩後輩の意識の変化など同じ傾向にあります。個人の権利と核家族主義に偏った民主主義の進行により、多くの人々は人と人との絆の弱さ、連帯意識の希薄さによる無縁社会がいかに不安で無味乾燥であるかを体感していることだと思います。

今年度、県内外の同窓会支部総会に招待され出席しましたが、特に県外の支部活動を今日まで営々と継続されてきた諸先輩に改めて感謝申し上げます。その懇親会ではかつての青年と同じく朗々と「巻頭言」を吟じ、寮歌「南に遠く・・・」を歌い踊り、最後に校歌「楠の葉の・・・」を高らかに合唱し、同窓の絆を深めることができました。

これからは同窓生の連帯と絆を再び深める同窓会活動でありたいと念願しています。

農学部本部はもちろんのこと県内外の支部におかれましても、尚一層会員同士の連帯と絆を深める努力と工夫をお願い申し上げます。

目　次

・新たな連帯と絆を深めよう……Ｐ１
・ご挨拶　農学部長　藤田　修二 ……Ｐ２
・農学部同窓会の動き……Ｐ３～４
・佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会
……Ｐ４～５
・農業版 MOT 第一期生13人が巣立つ……Ｐ６
・会員の広場……Ｐ７
花を愛で、その根を想う　山下　正隆
喫茶去　宮崎　秀雄
近況　山田　和由
・支部だより……Ｐ９
沖縄支部、『農業自営者の会』事務局、佐賀県庁支部

ご挨拶

農学部長　藤　田　修　二

同窓会員並びに関係の皆様には、平素から本学部・本研究科の教育・研究の活性化や管理運営のために物心両面から、ご尽力、ご援助を賜り、心から厚く御礼申し上げます。また、会員の皆様のご活躍をマスコミ等により見聞きするにつけ、力強く感じております。

さて、本年４月から野瀬昭博先生のあとを受けて、私が農学部長の重責を担うこととなりました。早いもので昭和47年園芸学科の助手として赴任後39年、あと定年退職まで２年、これまでの研究等をゆっくりと纏め上げようと思っておりましたところ、思いもかけず学部長に指名されてしまい戸惑っておりますが、皆様方のご協力、ご支援を借りながら、何とか職務を遂行していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

本学部は平成18年にそれまでの２学科（生物生産学科、応用生物科学科）から３学科（応用生物科学科、生物環境科学科及び生命機能科学科）に改組、大学院も平成22年４月から２専攻（生物生産科学、応用生物科学）から１専攻（生物資源科学）に改組し、来年３月には初めての修了生を出すことになります。つまり、今年度末には学士課程から修士課程までの６年間の改組が完結します。また、大学院の改組に合わせて修士課程の副コースとして全国でも初めての農業技術管理学コース（農業版 MOT）が開設され、同時に併設された社会人のための農業技術経営管理士養成講座（夜間：１年制：定員10名）は全国的にも大きな関心を呼び、多くの希望者の中から12名の方が選ばれ、今年３月には初めての修了生を出すことができました。修了生の皆様の地域農業の牽引者あるいは農業ビジネス展開の担い手としての、今後のご活躍が期待されます。

21世紀は食糧とエネルギーの時代であるといわれています。これらの問題に大きく貢献できるのは農学部であり、その意味では今世紀は農学部の世紀であるともいえます。本学部における活動を植物生産に例えれば、教育・研究を通じてより優れた花や果実等を生産し、最終的には卒業生という「種子」を生産することとなります。我々教職員一同は佐賀の大地で育った「種子」が全国あるいは全世界に散らばり、それぞれの土地でしっかりと根を下ろし、大輪の花を咲かすことを祈念しています。そのためには、同窓会という「水と養分」が必要・不可欠なものとなります。その意味でも同窓会の先輩諸氏は後輩達を温かい目で見守り、必要な場合には援助の手を差し伸べてくださるようお願いいたします。

最近、私の周りでも親子２代にわたり、本学部で学ぶ例が増えてきており、非常に喜ばしいことだと思っております。本学部では「農学分野の基礎的な知識・技術を体系的に習得し、農学に関わる業務を遂行する職業人としての必要な実践能力を有する人材を育成する」ことを基本理念の一つとして教育・研究に励んでおります。受験生が「偏差値により入れる農学部ではなく、希望して入りたい農学部」となるよう教職員一同なお一層努力してまいる所存です。重ねて同窓会員の皆様のご協力、ご支援をお願いいたします。

末筆ながら、同窓会の皆様のますますのご健勝・ご多幸とご活躍を心から祈念し、学部長就任のご挨拶といたします。

農学部同窓会の動き

●平成22年度　農学部同窓会長賞　３名に授与

農学部同窓会長賞の授与

受賞者の方々　左から　平田みよさん　堀江健太さん　副島久義さん

佐賀大学の学位授与式が平成23年３月24日、佐賀市文化会館で行われました。全学５学部（文化教育、経済、医学、理工、農学）の1347名、うち農学部では161名が卒業、大学院修士課程では全学で382名、うち農学研究科では40名が修了しました。

また当日は農学部恒例の「祝賀会」がホテル・ニューオータニ佐賀で開催され、農学部同窓会長賞が杉町信幸副会長から３名に賞状と記念品が授与されました。受賞者の氏名と受賞理由は次のとおりです。

○　堀江健太　農学研究科生物生産学専攻　新酵母（TCR７）の開発

○　平田みよ　生物環境科学科　佐賀大学産官学連携推進機構主催の第５回佐賀ビジネスプランコンテスト」金賞　「佐賀を小豆皮ワインのブルゴーニュに！」

○　副島久義　生物環境科学科　特許「チロソール高生産性酵母変異株を用いた発酵アルコール飲料の製造方法」

また、受賞者の平田みよ（現在、佐賀大学大学院農学研究科生物資源科学専攻）さんから、受賞に対するお礼の文が寄稿されましたので、併せて紹介します。

寄稿

平田みよさん

今回、このような名誉ある賞をいただき、とても嬉しく思います。

受賞の対象となった「小豆発泡酒の開発」は、佐賀県の新しい特産品を作りだすことを目的に始めました。ほんのり甘く、小豆特有の色素をもち、小豆にある健康機能性を十分に引き出した発泡酒を目指して開発に取り組みました。開発にあたり、まず問題になったのがあずき特有の苦みでした。この問題は、実際に羊羹を製造している工場へ出むき、現場の方の話をヒントに解決することができました。

しかし、最大の課題となったのが、あずき特有の色素を発泡酒に出し、より高い健康機能性を付与することでした。小豆の色素の主成分であるアントシアニンの性質により、独特の色合いを出すのが難しく、様々な条件で仕込み・分析を重ねました。そして、仕込み期間中にあずきの煮汁を添加する２段仕込みの手法が有効であるという結論に至りました。

時には研究室のメンバーに助けてもらい、問題にぶつかるたびに先生と話し合い、次の方向を決め、実験に取り組みました。

試行錯誤を重ねた結果、現段階で納得のいく小豆発泡酒の開発に成功し、佐賀大学産学官連携推進機構が主催するビジネスプランコンテストでも金賞を受賞することができました。

同窓会会長賞を受賞できたのは、ご指導し、機会を与えてくださった北垣先生を始め、研究室の仲間、両親など沢山の人々おかげです。

素敵な出会いに感謝し、大切にすることを忘れずにこれからも頑張っていこうと思います。

●平成22年度の「在学生支援活動」は次のとおりです。

❶大学入門科目

平成22年７月16日、吉田春香さんを講師に農学部１年生を対象に「大学入門科目」が開催されました。吉田晴香さんは、平成19年生産システム情報学卒業、現在はJA福岡市に勤務です。

❷キャリアデザイン講座

全学の学生を対象に各学部の卒業生が講師役を務めるキャリアデザイン講座が開催されました。農学部から、平成23年１月12日に橋口敏光（昭和52年園芸学科卒業、現在はパイオニア・エコサイエンス勤務）さん、同じく１月19日に原口真由子（平成14年応用生物科学科卒業、現在は鳥栖・三養基地区消防本部勤務）さんが担当されました。

❸就職ガイダンス

就職ガイダンス講師の長野沙織さん（左）と人事担当者

農学部３年生を対象に、平成22年11月17日に向井賢吾（平成21年応用生物科学科卒業、現在は山崎パン勤務）さん、長野沙織（平成22年生命機能科学科卒業、現在は伊藤ハム勤務）さん、辻田あずさ（平成９年生物生産学科卒業、現在は嘉麻市役所勤務）さん、五十嵐総一（平成22年応用生物科学科卒業、現在は農林水産省勤務）さんの４名が講師を担当されました。

佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会

今回で３回目となる「佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会」が、平成22年12月３日、グランデはがくれで開催されました。農学部からは野瀬学部長はじめ５名、同窓会からは金丸会長、各支部長、役員など10名が参加されました。当日の概要は次のとおりです。

1 同窓会長のあいさつ

金丸　安隆

この会は年に一度の農学部と同窓会の意見交換の場であります。今年は役員改選の時期であり、役員がほとんど替わっております。このため、最初に農学部の現況と課題、学生の大学生活や就職の状況などについてお話を頂きたいと思います。

また、今回は各支部長にお願いして、事前に各支部の農学部への意見、要望などを取りまとめていますので、これについても意見交換したいと思います。

農学部同窓会は、同窓の方々にどんなことができるのか、母校の農学部、農学部の学生に対してどんな支援ができるのか、これは永遠の課題だろうと思いますが、このような視点に立って、今日の意見交換会に臨んでおります。

どうか、実りある活発な意見交換となるよう、お願いいたします。

2「農学部の現況報告及び今後の取組みについて」

佐賀大学農学部長　**野瀬　昭博**

1）農学部は平成18年４月に学科改組を実施し、応用生物科学科、生物環境科学科及び生命機能科学科の３学科から成る新しい学部に生まれ変わりました。４年が経過し、２学科ら３学科にしたことがどの程度有効であったかについて検討評価を始めました。

2）大学院農学研究科は、平成22年４月に従来の２専攻（生物生産学専攻・応用生物科学専攻）から生物資源科学専攻の１専攻５コース（応用生物科学・生物環境保全学・資源循環生産学・生命機能科学・地域社会開発学）へ改組しました。

　これとは別に、農業技術経営管理学の副コースを選択することも可能です。これは農業技術経営管理学コースをとりやすくする、また２単位制から１単位制にすることで、いろんな科目を修得できる選択肢を増やすためです。

3）平成22年度に、農業版 MOT コースが国立大学の農学研究科の中で最初に発足しました。１年間に150時間の履修をすれば、「農業技術経営管理士」の履修証明を出すことになります。このコースには大学院副コース学生１名と社会人特別課程の12名が在籍しています。社会人には経済学部研究科の講義も受講できるようになっています。

4）教養教育については、全学部で教育プログラムを作る全学方式で実施されています。学部教育は専門教育も大事だが一般教養教育もしっかりやりなさいと、文部科学省から言われている。そこで、教養教育の実施体制に関する具体的方策として、平成23年度を目処に「全学教育機構（仮称）」を創設し、新カリキュラムへの移行準備を経て、平成25年度から新たな教養教育を実施することになっています。

5）佐賀大学には全学共同利用研究センターは設置せず、全国共同利用研究センターを設置するという方針が決定されました。農学部に関係する海浜台地生物環境研究センターが対象となりますが、「アグリ創生教育研究センター」を創設するよう計画しています。

6）施設関係では、ガラス温室の老朽化が激しかったため、６棟のガラス温室を更新しました。総工費は、１億円で農学部は受益者負担として2000万円を負担します。200万円／年、10年間で返済する予定です。

7）就職状況は大学運営連絡会資料によると、10月１日現在　農学部の内定率は61.8%で昨年より４ポイント程度低下している。全国平均は57.6%（▲4.9）、国公立は63.2%（▲8.1）となっている。地区別では、九州地区51.5%（▲8.2）であり、統計的には、佐賀大学農学部は全国平均よりすこし良いようです。しかし、実感としては、学生が焦って頑張った結果、この数字になっており、来年はさらに厳しくなると思います。

　佐賀大学の学生は、おとなしくひかえめで集団面接、自己アピールが苦手なようで第１期の就職試験で落ちてしまうのです。このため、その後、危機感を感じて頑張り９月から10月に就職がきまるようです。キャリアデザイン講座などを通して、第１期の就職試験に合格するよう就職のパターンを変えていきたいと考えています。

　いずれにしても、景気が悪い中、昨年の最終的な就職内定率80%後半に達するかどうか懸念しています。

3 意見交換

自営者の会長　**山田　和由**

　米あまりの中、佐賀県の転作は、大豆が中心であり、今後さらに面積が増加している。一方、品質が厳しく要求されており、刈り取り作業における汚れなど品質基準にあう大豆が収穫できず困っている。農業新聞で農林水産大臣賞を受賞した出雲の集落営農の記事が掲載されていた。ひまわりを10ヘクタール栽培し、ひまわりの種子から油を取っている集落営農が紹介されていた。大豆に変わる作物を開発してほしい。

これに対して、野瀬学部長から

　佐賀大学は遺伝子組み換え技術でない、突然変異による新規大豆交配技術でより高い高オレイン酸含量の新規ダイズ品種を開発している。佐賀県の農協や行政が関心を示さないのは、不思議に思う。このような技術や品種があるので、利用してほしい。

　その他、「アグリ創生教育研究センター（仮称、平成23年４月開設予定）」の説明と意見交換がありました。しかし開設が延期になりましたので、これに関しては割愛しました。

（文責　緒方　和裕、村岡　実）

農業版 MOT 第一期生13人が巣立つ

農学部同窓会の先輩諸兄の皆さんには、いかがお過ごしでしょうか。平成22年度から本学大学院農学研究科で本格的にスタートした農業版 MOT 教育の現状をご紹介いたします。

本学大学院農学研究科では、平成23年３月24日、第１回の農業版 MOT コースの修了式を行い、野瀬昭博研究科長から大学院副コース履修生１名と社会人特別の課程の受講生12名の計13名に「農業技術経営管理士育成プログラムの履修証明書」と「佐賀大学農業技術経営管理士の称号」を授与いたしました。

本コースは、平成21年度文部科学省「組織的な大学院改革推進プログラム（大学院 GP）」に採択された「高度な農業技術経営管理者の育成プログラム」に沿って、農学研究科と経済学研究科の連携のもとに、農業経営と地域農業の革新、食と農の新しいビジネスを担う人材の育成を目指して一年間、「農業技術・経営管理等についての講義」や「経営分析・情報処理等の演習」、また先進的農業経営等の「現地研修」に取組んできました。

特に社会人の受講者の皆さんは、１年間、農作業や業務終了後、夜間18時からの講義や演習で大変な毎日が続きました。11ha のタマネギを栽培するＮさんは収穫作業や定植作業に追われたり、生育遅れに悩まされたイチゴ農家のＡさん、また福岡市から高速を利用して皆勤されたＮさんやＨさんなど、それぞれに苦労を乗り越えながらの１年間でした。

また、修了研究論文の作成については、発表用の資料作成、PPT でのプレゼンテーションなど農業者にとっては日頃、あまり経験しない作業が多く、発表前１ヶ月間は、深夜まで大学に残って懸命に頑張っておられました。

１月28日には修了研究論文の発表を行いましたが、折からのインフルエンザの流行で農業者の１人は、特別に２月８日に発表するというハプニングもありました。

発表会では、新しい農・商・医・教育・地域の融合による新たなビジネスプランの提案、土地利用型農業の経営改革プランの提案、太陽光発電の農業的利用、農業キッズ公園の具体化、集落営農の法人化、地域金融機関の農業への貢献方策など、いずれも自ら直面している課題を取り上げた研究発表が多く、その内容は具体的で外部審査委員からも高い評価を受け、また大学院生や学部学生にとっても非常にいい刺激になりました。

（先進地視察研修：おおむら夢ファームシュシュ、H22.７.３、大村市）

（農業版 MOT コース修了式、H23.３.24、農学部玄関で）

受講者からは「幅広い視点から科学的に物事を考える機会になった」、「異業種の人と交流でき、事業の提携の話が具体化した」、「いつでも大学に相談できる関係ができた」、「若い人に農業版 MOT 受講を強く勧めたい」、「もっと多くの科目を履修したかった」などさまざまな意見があった。これらの意見を大切にしながら大学院教育の実質化や社会貢献も含めて、さらに創意工夫をしていくことが必要であると思っている。

最後になりましたが、農業版 MOT 教育の推進にあたっては、農学部同窓会からさまざまな形で支援をいただいています。特に先進地視察研修の実施、MOT 卒業生間の情報交換やインターンシップ等を通した大学の教育研究との連携をさらに強化するため組織した「佐賀大学農学部アグリ・マイスターの会」の発足についても、多大なご支援をいただき重ねてお礼を申し上げます。23年度は、大学院２年生10人、社会人12名が MOT で学ぶことになっています。

今後、MOT 第一期生の皆さんが、地域農業や組織のリーダーとして MOT 教育で学んだ知識や経験を生かし、それぞれの分野でご活躍されることを心から期待しています。

農業版 MOT コース　特任准教授　**内海　修一**（49年農経：院卒）

会員の広場

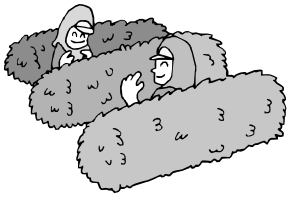
花を愛で、その根を想う

山下　正隆

大学卒業後は農林省茶業試験場に入り、鹿児島県薩摩半島南端の枕崎支場という小さな研究施設でチャの栽培生理研究をやることになりました。当時の装備と予算は貧弱でしたが、人と研究材料に恵まれ、チャを中心として作物の根をライフワークにすることができました。根にこだわった理由は、私の恩師藤井、田中両先生から、根は研究対象としては非常に扱いにくいが、作物生産にとっては見逃せないことを学んだこと、もう一つは、薩摩半島地域では昭和35年頃から国策として紅茶の生産が奨励されたにもかかわらず、その後は輸入自由化のため挫折させられました。私が赴任した昭和40年代後半は、地域茶業界が生き残りをかけて紅茶から緑茶に転換しようとする激動期にあたり、試験研究に寄せる期待が大きかったことです。この２つをつなぐ接点は、チャの根をとにかく観ることと現場を診ることにあったと思います。20年かけて得た結果もチャの根の特性の一部に過ぎませんが、永年性木本作物であるチャの根系は形態、生理機能の異なる根で構成され、実生樹に比べて挿し木樹では浅根化すること、成木での年間の根の生長は新芽収穫に左右されず、明瞭な周期性を示すことなどを明らかにしました。さらに、実用場面での技術すなわち江戸期に遡る樹勢更新を目的とした深耕・断根処理の意義を根の特性に基づいて検証しました。これらの結果は、その後現場に活かされているようで、嬉しく思っています。と同時に、先人の知恵はすごいものだということを再認識させられました。

その後、九州農業試験場都城でサツマイモ、野菜茶業試験場久留米でイチゴを扱った後、平成21年に現役を引退し、現在は（独）九州沖縄農業研究センター久留米で広報業務を主に担当しています。本年度から九州唯一の大型植物工場施設が稼働します。ぜひ一度おいで下さい。

昭和46年卒・農学科作物学専攻、昭和61年「茶樹における根群の形成と断根後の根の再生に関する研究」により学位（農学博士：九州大学）取得



喫茶去

宮崎　秀雄

昭和58年に佐賀大学に入学し、縁あって一年生の夏休みに佐賀県農業試験場病害虫研究室、二、三年生時には果樹試験場病害虫研究室でアルバイトさせていただきました。一年生時から植物病理学研究室に出入りするようになり、野中先生、佐古先生ならびに田中先生には篤くご指導いただきました。この間の出会いや経験が、私の人生に大きく影響していると感じています。

平成元年に佐賀県茶業試験場に異動してからは、ほぼ一貫して佐賀県の特産茶種である玉緑茶の製茶加工並びに品質評価技術の改良開発に取り組むと同時に、生産現場への技術普及を行ってきました。その間、製茶研究室のメンバーとして３件の特許に携わり、昨年開発した「高品質釜炒り茶の効率生産が可能な製茶機械」については、その茶が市場において高い評価を得たことから、平成22年11月に特許を出願しました。

また、学会活動にも注力し、日本茶業技術協会および九州農業研究発表会はほぼ毎年、農業機械学会本大会は５年連続、その他にも日本食品科学工学会等で研究発表を行っています。昨年度、それらの成果の一部を「分光学的手法による玉緑茶の特徴解析および品質評価技術に関する研究」という論文にまとめることができました。これは、九州大学大学院農学研究院の内野先生にご指導いただき、井上、田中両先生にご助言いただいた賜です。本論文は、西九州地域の特産茶種である釜炒り製および蒸し製玉緑茶について、茶種の特徴把握ならびに品質定量化技術の確立を目的とし、簡便かつ迅速な分光学的手法を利用した茶種の特徴解析および品質的な欠点の判別方法を提案するとともに、官能評価の代替技術としての客観的品質評価手法を確立しようとしたものであり、研究成果は、茶市場を中心とした流通現場ならびに生産現場における栽培、加工技術の改善に活用されています。

お茶は日本の歴史や文化に欠くことのできないものであると同時に、その保健機能も高く評価されています。また、「喫茶去」（禅語、「お茶でも召し上がれ」の意）に表されるように、日本人の人生観や世界観にも大きく影響を与えていると言っても過言ではありません。お茶関係の仕事は、嬉野に生まれた私の天職と思い、喫茶去の心を持って取り組んでいきたいと考えています。ぜひ「うれしの茶」を飲みにおいでください。

昭和62年卒　農学科、植物病理学専攻
平成23年３月、「分光学的手法による玉緑茶の特徴解析および品質評価技術に関する研究」で、九州大学より学位（博士）取得

近況

自営者の会　会長　**山田　和由**
（Ｓ.49年、農学、農経　卒）

平成15年に、町議会議員との二足のわらじで始めたアスパラ施設園芸も、７回目の春芽の収穫期を迎えています。

６年前から集落営農の組合長、その後、生産組合協議会の会長に就任。地域農業や地域社会の橋渡し役として忙しい毎日です。

自称、人生二毛作の自営農家の目線で、団塊帰農、定年帰農、週末ファミリーへのネットワークを広げていきたいと思っています。

思い出のアルバム

「昭和37年卒業記念アルバム」から

今回は、佐賀県支部会長の加々良光彦（農学・農土　37年卒）さんから頂きました、３枚です。

写真１　「大楠」は佐賀県庁行政棟正門の西側の大楠で、遠景の３階建ては郵便局（現在は「日本郵便佐賀支店」）です。いずれも現存しています。平成10年２月に堀越道路（くすのさかえはし）ができましたが、お堀の周りには今も大楠が佐賀のシンボルとして年輪を重ねています。

写真２　「旧農学部」は昭和41年に現在のキャンパスに移転する前で、県庁行政棟南側にあった頃のものです。現在は、佐賀県庁の駐車場やサガテレビ（通称 STS）になっています。なお、門柱は現在もそのままです。

写真３　「附属農場」は東側の道路からのもので、木造２階建ての建物は鉄筋コンクリートの建物に建て替えられていますが、門柱は今も現存しています。なお附属農場は現在、「佐賀大学農学部附属資源循環フィールド科学教育研究センター」となっています。

写真１：県庁前の「大楠」

写真２：旧農学部の「門柱と校舎」

写真３：付属農場の「門柱と校舎」

支部だより

沖縄支部懇親会

平成23年１月21日㈮、那覇市内「ロワジールホテル那覇」において沖縄支部懇親会が開催されました。

当日は支部会員13名に加え、本部から来賓として宮島会長、梅崎副会長、田中副会長、金丸副会長もご参加頂きました。

当支部は約20年前、同窓会顧問であられる山崎武先輩が松尾建設沖縄支店に在勤中に、当時の経済学部長石橋先生たちにご来賓頂き支部として発足いたしましたが、その時以来のご来賓とあって支部会員一同当日を大変楽しみにしておりました。

各氏から大学や同窓会の近況や他支部の活躍ぶり、懐かしい昔話などの紹介があり、その後、参加会員の近況報告を兼ねた自己紹介と続き、盛会な交歓になりました。

沖縄支部は会員23名の小支部ですが、発足以来毎年懇親会を開催しており、梅崎副会長から参加率は全支部のなかで一番だと激励され、妙な（？）自信を感じております。

締めくくりは発足当時以来の担当、宮国榮氏（43年入学経済）の巻頭言、続く「南に遠く」の踊りの輪は南国沖縄でも脈々と受けつがれています。

最後に、当支部顧問（初代支部長）の大濱和男氏（法律・昭和25年入）が発行したご尊父であられる沖縄を代表する詩人大濱信光氏の詩集（全365ページ）の全員への寄贈があり記念の懇親会になりました。

沖縄支部支部長　平良　克次（経済・42年入）

『農業自営者の会』同窓会支部便り

本会は平成９年２月、支部会員相互の研修と親睦を図り、農学部同窓会が行う事業の推進並びに母校佐賀大学農学部の発展に寄与することを目的に、農業を自営する同窓生43名と準会員13名が結集して設立されました。この間、年に１度の勉強会・懇談会を重ねて参りました。特に平成11年には佐賀県知事との懇談会を農学部大会議室で開催しましたが、当時の野口好啓会長はじめ多くの会員から意見要望が出され元気でした。

昨年は12月、本会総会を15名の会員参加を得て佐賀市内朝風ホテルで行いました。現山田和由会長の挨拶の後、会員各自が経営現況と思いを語り、大いに議論沸騰しました。この場では、一定の礼儀はありますが、大先輩にも無礼講で斟酌ない議論があります。

TPP も飛び出す時勢、「久しぶりに会員総勢が大集合して勉強会でもやっか」という意見が出ています。

事務局　白武義治（51年卒・農業経営経済学）

農学部同窓会佐賀県庁支部「先輩を送る会」を開催

佐賀県庁支部では、去る３月16日に佐賀市の「グランデはがくれ」において、平成23年３月末をもって御退職になる方への「先輩を送る会」を開催しました。

御退職になる先輩方は、實松孝明様（Ｓ48年卒　植物病理専攻）、光武隆久様（Ｓ48年卒　発酵専攻）、堤泰子様（Ｓ49年卒　果樹専攻）、牟田香様（Ｓ49年卒　土改専攻）、山口俊治様（Ｓ49年卒　土改専攻）、三好利臣様（Ｓ50年卒　作物専攻）の６名でした。

当日は約70名の会員が集い、記念品や花束の贈呈、

県庁支部旗の下参加者全員で記念撮影を行い、その後、先輩方を囲み県庁生活の思い出や苦労話を伺うなど、楽しい歓談の時を過しました。

なお、今回は１週間ほど前に東日本大震災が発生したことから、開会に先立ち、今回の震災で犠牲となられた方々に哀悼の意を表し、黙祷を行いました。また、恒例の二次会は中止とし、それに予定していた経費などを加えて10万円を義援金として、後日寄付いたしました。

支部会員一同、先輩方の今後益々の御健勝と御活躍をお祈り申し上げますとともに、今回の震災で被災された地域の１日でも早い復興を願うところであります。

副支部長　松尾　孝則（Ｓ52年卒・植物病理学）

佐賀の風景

天山の冠雪遠望

佐賀のシンボル、天山。標高1046m、佐賀大学キャンパスからは北西にそびえ、四季折々に遠望の風情を与えてきました。学生時にも、卒業後にも登山された方も多いのではないかと思います。暖冬傾向の中、でも今年は久々に麓の辺りまで「雪化粧」でした。（撮影　2011.１.11）

紅葉のシチメンソウ

佐賀市の南端、東与賀町の有明海沿岸「干潟よか公園」にはアカザ科の一年草で「シチメンソウ」が群生しています。干満約６ｍでも有名なこの地では、満ち潮の時には海水中に、引き潮の時には地上に現れます。海水の塩分でも生存でき、10月下旬頃からは徐々に赤く色づき始め、「海の紅葉」との別名があります。

生息地は世界でも佐賀、長崎の有明海沿岸、北九州市から大分県北部の海岸、朝鮮半島からこれに隣接する中国の海岸のみとされています。（撮影　2009.10.28）

嬉野の大茶樹

佐賀の名産「うれしの茶」のシンボルでもある「嬉野の大茶樹」。1650年頃に、吉村新兵衛（1603～1657）が植栽したものとされ、樹齢は約360年で「中国小葉種」の中では、世界最大とも評価されています。大正15年10月20日、国の天然記念物に指定されています。（撮影　2009.12.11）

編集後記

いつかは起こるであろうとされてきた「宮城県沖地震」が、３月11日にこのような大惨事をもたらす形となりました。その後に「東日本大震災」とされたこの震災は三陸の居住地を破壊し、東京電力の福島原子力発電所ではまだ予断を許さぬ状況が続いています。

被災された方々にお見舞い申し上げ、力強い復興を祈念いたします。同窓生諸氏の被災状況が把握できていませんが、本学同窓会として義援金をお届けしています。

さて、このような状況の中、同窓会誌「ありあけ」第８号をお届けいたします。情報過多とも言える昨今、何か心に響くものをお届けする気概ではおりますが、不慣れな編集作業のために、まだまだその域には至っていません。今回の会誌に玉稿をお寄せ頂いた方々にお礼申し上げます。

第９号は12月１日の発行です。同窓生諸氏の近況、名所・旧跡の話題、「思い出のアルバム」など、お寄せ頂きますようにお願いいたします。